

---

# 異説鬼退治

Joker

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異説鬼退治

### 【Nコード】

N3281L

### 【作者名】

Joker

### 【あらすじ】

名神高速逆走を繰り返すお婆さんとセクハラ三昧&悪行三昧がモットーのお爺さんは好きですか？このお話は株式会社鬼が島をめぐる現代の桃太郎のお話です。とにかく最初から最後までドタバタ、やりたい放題のお爺さんとお婆さんが主役です。それでは、開幕！

## 異説鬼退治？

むかしむかし、あるところにお爺さんとお婆さんがいました。

今日もいつものようにお爺さんはハードバルカンを片手に大江戸銀行へ、お婆さんは日本刀を持って川へ洗濯に行きました。

お婆さんが川で洗濯をしていると大きな桃がどんぶらこ、どんぶらこと逆流してくるではありませんか。

さすがにお婆さんは顔が引きつります。

しかもお婆さんの手元まできて、桃はひとりではぱかりと割れました。中から出てきたのは一糸纏わぬマッチョなヒゲオヤジです。悪夢です。トラウマものです。

「……！」

お婆さんは声にならない声をあげます。

「おお、お婆さんがワシの命の恩人か。ワシはドドリゲスⅡエルハイマン14世。ローマ法王の命により日米相互連携条約の締結に参った」

ローマ法王はイタリアにいますと突っ込んではいけません。何で変態がこんなところで条約締結とかのたまっているのかと突っ込んではいけません。そういう小説なのですから。

お婆さんは数秒して気持ち落ち着かせると無言で刀を振り上げてオヤジを斬りました。

「またつまらぬものを斬ってしまった……」

本当につまらないものを斬ってしまったかのようにつぶやきます。しばらくすると、大きな桃がどんぶらこ、どんぶらこと川上から流れてきました。

今度はまともだと思ったのか、中に配慮してお婆さんは桃を優しく斬りました。

中から出てきたのは可愛い赤ん坊です。

「おお、めんこいのうー！ よし、お持ち帰りしちゃうー！」

それを一般的に拉致というのですが、お婆さんにそんな概念はありません。

お婆さんが家に戻るとお爺さんは警察に逮捕されていました。大江戸警察の逮捕状には軽犯罪法違反と書かれています。

「この間抜けが！ 自分で脱獄してきんさい！」

お婆さんの広島弁がエクセレントですね。とりあえず、お爺さんとお婆さんの日常はこんなものらしいです。

「うむ、待っておれ！ ワシが帰ってきた暁には鬼が島？を打ち倒しにいくぞい！」

ここでの鬼が島というのは株式会社鬼が島のことを意味します。

お爺さんはそこに何か因縁があるようですね。何の因縁かは後のお楽しみ。

こうしてお爺さんは警察に連行されていきました。

お婆さんはそれを見送った後、桃太郎を家にいれて食事の準備をします。今日の昼食はザツハトルテと伊勢海老のクリーム煮地中海風ブイヤベースソースにすることにしました。

お婆さんはそれらをあつさりと平らげると桃太郎にイノシシ肉の香味焼きを出します。赤ん坊なので食えるわけなのですが、こちら辺は根性で何とでもなるとお婆さんは思っていました。

「さつさと食うべさ！ 3年くらいで大人になって鬼が島？を占領するんじゃ！」

もつどこから突っ込んでいいのか分かりません。

そんなこんなで3年ほど経ちました。赤ん坊は素直な子どもに育っていきました。

しかし、あれこれと騒ぎがあったのでまだ赤ん坊に名前をつけていません。お爺さんも脱獄してきたので、夫婦揃って名前を考えようということになりました。

「そうさのう。デラックスでイカした名前にせねばならんのう」

お爺さんは頭をひねります。

「世界中の女を虜にするようなクールな名前が良いのう」

お婆さんも知恵を絞ります。

「そうじゃ、『グゲゴロス』はどうじゃ？」

これはお爺さんの発案。

「うんにゃ、センスがない！ 『ポコポーン』で決まりじゃ！」

お婆さんはお爺さんの案に反対します。

当の本人は目を丸くして、このアホな名付け合戦を見えています。

「ワン太郎！」

「ヒゲ次郎！」

「ゴン三郎！」

「狂四郎！」

「熊五郎！」

「トリケラトプス！」

そろそろ兩人とも疲れてきたようです。既に恐竜の名前が出てきている時点でアウトです。

「そろそろ決めねばのう……」

お爺さんは肩で息をしています。

「うむ……」

お婆さんは何やら考え込んでいます。

「そうじゃ、世紀末霸王の名をとってマルクスⅡアウレリウスⅡアントニヌス4世でどうじゃ？」

これはお爺さんの発案。多分アニメ以外に世紀末霸王なるものは存在しません、しないはずです多分。

「うんにゃ、桃から生まれたんじゃ。ザⅡピーチⅡロドリゲスがい  
い」

名づけられる本人からすれば悪質な嫌がらせ以外の何者でもありません。

「……いや、いかん。美的センスがない。和の心をもって、桃太郎と名づけよう」

意外と常識的な名前を出しました、お爺さん。

「……よかるうて」

大人しくお婆さんが従います。これはメテオが地球に降り注ぐ予兆なのか？

「うむ、これで万事解決」

お爺さんが満足そうに頷きました。

これから波乱万丈な人生が待ち受けていようとは誰もわからないのでした。それは、当の桃太郎が一番分かっています。

そして、桃太郎はすすくと成長していき、15歳になりました。

「桃太郎や、鬼が島？を倒すのじゃ」

お爺さんとお婆さんから指令が下ります。

こうして、鬼が島？での鬼退治が始まりました。

異説鬼退治？（後書き）

こんばんは、Jokerです。

こちらも一部見直しての再投稿です。

お気に入り登録してくださった方、申し訳ありませんでした。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

## 異説鬼退治？

桃太郎はお婆さんから名刀『正宗？』を受け取るとそれを腰に差します。

といつても、ジーパンにTシャツ姿ですから、相当違和感があります。この辺が本家の桃太郎と異説桃太郎の違いですね。

「桃太郎や、鬼が島？は大江戸の桜田門町にあるのじゃ。そこを潰せ」

物騒な指令がお爺さんから下ります。

「お爺さん、僕一人じゃ勝てないと思うんだ。仲間が必要だよね」  
桃太郎、破天荒な育ての親を見てきたせいも、現実的です。

「うむ。ではワシがミサイルランチャーで援護射撃をしてやろう」  
本当にやりかねません。

「それにワシもある。ワシは織田信長に命じて宇宙から空爆させようぞ」

お婆さんは信長の主らしいです。太陽を食べたとかいう、どこかのファーストレディ並みのぶっ飛んだ台詞ですね。

「うん……期待してるよ」

桃太郎は呆れながら言いました。

「ところで、何故鬼が島？なの？ 普通鬼が島の悪い鬼を倒すためじゃないの？」

根源的な質問を桃太郎は投げかけました。

「うむ、現代においては株式会社を占拠する鬼どもを倒すのが現代版の桃太郎なのじゃ」

わけがわかりません。

「とにかく、じゃ。まずは適当に犬とサルとキジを見つけるのじゃ」というわけでまずはこの三匹を見つけることになりました。

桃太郎の家は大江戸港区にあります。街中です。とりあえず、仲間探しに出発です。

今日は快晴です。こんな日には野球やサッカーをして、グラウンドを走り回りたくありません。そんな気持ちのいい天気でした。

街に出ると、武器屋や防具屋があります。ドラクのような大江戸です。

桃太郎はまず武器を買うことにしました。

出発の際、お爺さんからお金の調達方法について教わりました。

それによると、『とにかく銀行を襲え』だそうです。鬼が島？に行く前に豚箱送りが関の山です。

ですが、桃太郎は常識の分かるよい子なので、事前に分かたお金を用意していき、武器屋で『金属バット』を買いました。

武器屋を出て、しばらく歩くといじめられている犬がいます。

いじめているのはお婆さんでした。

「お婆さん！？ 何してるの？」

お婆さんは『ヴァアヴァア天下』と書かれたねじり鉢巻をして、鉄パイプを振り回していました。片足をヤバイ世界に入れていそうな感じがします。手遅れ感満々ですが。

「桃太郎か？ こやつ、ワシのみたらし団子を横取りしよったから、天誅を加えていたのだ」

駄目だコイツ早くなんとかしないと。

「それ、動物保護団体に訴えられるよ。それに痩せてるイヌだし、ちよつとかわいそうだよ」

優しい桃太郎は犬をかばいます。

「やかましゃい！ 動物保護団体なんぞ返り討ちじゃ！」

本当にやりかねないので、何とか近くの団子屋で10本くらい、みたらし団子を買ってお婆さんにあげました。そして、みたらし団子を頬張っている間に犬を連れて退散しました。

「大丈夫？」

桃太郎が心配そうに犬を見ます。

「わんわん」

犬は答えました。

「大丈夫そうだね。おなかすいてるみたいだから、餌あげるよ」  
わずかな下心もなく、桃太郎は餌を買って犬に与えました。

犬は夢中で食べます。食べ終わると、犬は桃太郎に目を向けました。

「もしかして、ついてきてくれるの？」

「わん」

忠義があるのか、犬は信頼の（？）眼差しを桃太郎に向けました。  
「ありがとう。一緒に鬼退治に行こうか」

桃太郎は犬を仲間にすることができました。

さて、一日目はこれで家に戻ります。

家に戻るとお爺さんとお婆さんが喧嘩していました。

「lkjwがえdらは\*@」

地球上の言語で喋ってもらいたいものです。作者も言語化出来ません。

「ただいま」

少々げんなりして、桃太郎が家に入りました。

「おお、桃太郎や。婆さんがの、キャバクラに行ったとかで怒っておるのじゃ」

コメントする気力もありません。

「当たり前じゃ！ キャバクラ幕府が出来たのは1192年だとか言うのじゃ。日本史ではキャバクラ幕府は2009年と決まっておる。それを否定しおったのじゃ」

もう何も言えません。言いたくありません。

「喧嘩なら、家を木っ端微塵に爆破しない程度にやってね。僕は寝るから」

付き合ってられないので、桃太郎は寝ることにしました。

桃太郎が眠りについてしばらくした頃です。台所から物音がしました。どうやら、泥棒のようです。

桃太郎は刀を持って、音のした場所へと足を運びます。犬も桃太郎についていきました。

「おによれ！ 貴様が！ フルボツコの刑に処してくれるわぐふふ」

お婆さんの声です。何かもう、色んな意味で手遅れの感がしました。

案の定、桃太郎と犬が台所に足を踏み入れると、金属バットを持ち、背中に『悪行三昧』と文字がプリントされた特攻服を着たお婆さんが泥棒と思われる影を踏みつけていました。これじゃあ、どっちが悪者か分かったものじゃありません。

「おお、桃太郎や、大江戸警察を呼んでくれ」

この状況で逮捕されるのは泥棒ではなく、お婆さんでしょう。

桃太郎は逆らったら怖いので、素直に大江戸警察を呼ぶことになりました。

異説鬼退治？（後書き）

こんばんは、Jokerです。

ほとんど手直しなしです。

お楽しみいただければ幸いです。

それでは次回またお会いできることを祈りつつ……

## 異説鬼退治？

「お婆さんは動物虐待の罪で大江戸警察に連行されていきました。まあ、三日もあれば脱獄してくるので心配ないでしょう。」

「桃太郎はお婆さんが警察署までドライブするために外に出た後、金属バットでしこたましばかれた影を見ました。」

「大丈夫？」

「優しい桃太郎は影に問いかけます。」

「うき」

「サル語で答えが返ってきました。」

「もしかして、サルをしばいてたの？ お婆さんは「そのようです。」

「サルは偉そうに腕組みして、手を桃太郎に出しました。何か寄越せ、というわけですね。」

「ごめんね。確かに無関係のサルに対して、殴りかかったわけだもんね。何かあげられるものは……」

「桃太郎が冷蔵庫を見ると、特製のみたらし団子がなくなっています。それは桃太郎が大切に大切にとっておき、お婆さんがいないときにくっすり味わおうとしていた物でした。」

「そして、サルの口もとはみたらし団子のタレがついていました。はい、犯人確定。」

「……………」

「桃太郎の額に青筋が浮かびます。」

「キツキツキ」

「さつさと寄越せとサルが催促します。」

「き……………」

「桃太郎は刀を抜きました。」

「キキキ！」

「サルはなおも傲岸不遜な顔で寄越せと言っています。」

「貴様にはこれで充分じゃあ！！！！ 刀のサビにしてくれ！！！」

「桃太郎がブチギレました。」

「わんわん！」

犬の静止も聞きません。

「ウキキキ?!」

サルは桃太郎の形相に驚き、台所を逃げ回ります。

「なんじゃあ、桃太郎か？」

お爺さんが起きてきたようです。手には何かを持っていました。

「桃太郎や、せっかくのワシのみたらし団子がまずくなるでな、騒ぐでない」

「お爺さん、コイツは名神高速道路を時速300キロで逆送しつつ引きずり回した後に、ギロチンにかけてもまだ恨みは晴れないんだ！！！」

「まあ、落ち着くのじゃ」

お爺さんは年長者らしく、いきり立つ桃太郎をなだめます。

「サルや、お主もこれまでの行いを反省し……」

「ウキッ！」

サルは高速でお爺さんが持っていたみたらし団子を奪います。そして、それを大きな口を開けて、口の中に放り込みました。

「……………」  
今度はお爺さんの様子がおかしくなります。小刻みに震えています。

「貴様……よもや、生きて帰れるとは思っていません？」

ブチギレています、お爺さん。桃太郎の比ではありません。

「貴様は市中引き回し、打ち首獄門じゃあ！！！！」

どこの四次元ポケットから取り出したのか、核ミサイルを持っています。お爺さんの七不思議のひとつです。

それに間違いなく、市中引き回しの前にサルは木っ端微塵になっていると思います。

「お爺さん、落ち着いて！ それじゃあ、街ごと爆破しちゃうよ」  
桃太郎が慌ててお爺さんを止めにかかります。さっきまでの怒りは危機でどっかにすっとんでいつてます。

「末代まで祟りまくってやるぞ！！！！ このエテ公めがあー！」  
駄目です。トランス状態です。

ここで桃太郎必殺の一言。

「ギャルが泣いちゃうよ」

ぴたりとお爺さんは止まりました。そして、顔には不気味なくらいにこやかな笑顔があります。

「……菩薩の心を忘れておった。サルよ、行くがよい」

サルが呆然としています。

犬も茫然自失です。

桃太郎だけが胸をなでおろしていました。

お爺さんが去って一段落すると桃太郎はサルに向かって言いました。  
た。

「じゃあ、この罪は君が僕と一緒に鬼退治することで償ってもらおうとしよう。いいね？」

桃太郎は優しく言いました。

サルは思いつきり面倒くさそうな顔をしています。

「いいね？」

刀を突きつけながら笑顔で再度言いました。

サルは冷や汗を流しながら、こくこくと頷きます。

「良かった。それから、脱走なんてしたら……分かってるよね？」

打ち首獄門……ロケットで太陽に向かって発射して細胞一つも残らない状態にするからね」

笑顔で桃太郎は言います。ヤンデレよりもきついです。

こうして、無事に（？）騒動は解決しました。

翌朝、桃太郎は犬とサルを伴って出かけました。

「そつえば、名前付けないとね。えつと……」

しばし、桃太郎は頭をひねります。

「犬はダイゴロウ、サルはホームズでどうかな？」

犬は嬉しそうに吠えました。

サルは何か寄越せと片手を出しています。

「これで決定！　じゃ、行こうか。ダイゴロウ、ホームズ」

桃太郎の冒険はまだ続きます。

**異説鬼退治？（後書き）**

こんばんは、Jokerです。

これはほぼ修正なしで再投稿します。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

## 異説鬼退治？

ダイゴロウとホームズを連れて向かったのは大江戸港町です。今の東京都港区あたりに当たります。

「いや、海はいいね！」

桃太郎は背伸びをしながら言います。

快晴の空。絶景の海。晩夏の太陽が空から眩い光を大地に注いでいます。

これだけなら、素晴らしい一日になりそうです。

しばらく、桃太郎が歩くと、亀と子どもが砂浜で何やらもめています。いや、いじめられているようです。

よくよく見ると、子どもが亀をいじているのではなく、亀が子どもをいじているというシュールな光景だということに気付きました。

「オラオラ、金出さんけえ！」

下品な河内弁です。亀さん。

「うわーん！ 誰か助けてよお」

子どもは涙を流して助けを求めます。

それを見た桃太郎たちは固まりました。いや、笑いを堪えるのに精一杯でした。

（これは一体何のギャグなんだ？ お爺さんの差し金？）

お婆さんが何か亀にクスリを盛ったのかもしれない。

「おいコラテメエ」

亀さんが綺麗な日本語で桃太郎たちに話しかけます。育ちの良い亀のようですね。

「な、何だい？」

桃太郎は少しびくりとしました。頭に「や」のつく自由業の方々に捕まった時のような心境を味わっていました。

「今からテメエらを龍宮城に拉致してやるからありがたく思え」

まさか『誰も頼んでねえよ』なんてこと言ったら、酸素ボンベなしで海中デートに誘われそうだったので

「はい……」

とだけ答えました。

「よっしゃ、そうと決まれば行くぜ！」

亀は強引に桃太郎たちを背中に乗せると、海へと豪快にダイブしました。

それから桃太郎たちは意識がありませんでした。気付くと、絢爛豪華な城が目の前にありました。

「ここが龍宮城だ」

亀が自慢げに言います。

桃太郎たちは豪華な門の前に立ち、その風景に驚いていました。

「おい、乙姫！ 今帰ったぞ。メシの準備は出来てるか？」

亀が怒鳴ると、城の門がゴゴゴと大きな音を立てて開き、そこから若く美しい女性が出てきました。きらびやかな衣装を纏った女性は

「お帰りなさいませ、ご主人様」

と艶やかな声で言いました。

よく見ると、この乙姫、メイド服を着ています。実は日本には大昔メイド服という大衆文化があったことを証明する歴史資料として、今日日本歴史学会で審議されているところです。実はこれが亀の趣味だったなんてことは口が裂けても言えません。

「す、すごい女の人だね」

桃太郎は驚きました。

「ワン」

「うき」

二匹も同意します。

「あまりの可愛さに声も出ないか？ まあそうだろうなぐふふ」

亀はにたにたと笑っています。

「それじゃあ、今日は客を連れてきたからたっぷりもてなしてあげてくれ」

龜はそれだけ言うと、龍宮城に入っていました。

「では、皆様。今日は蒸し鶏を用意しています。どうぞ」

柔らかな笑みで乙姫は桃太郎たちを城へと導きます。

城の中に入ると、美女たちがかなりきわどい衣装で舞台上を踊っていました。歓迎のためだそうです。

「ここにお爺さんがいたら、大変なことになってただろうね」

桃太郎はここにお爺さんがいないことに心底安堵しました。セクハラまがいのことをやりかねません。間違いなく

「ふおおお！ ぎやるじゃあ！ ぴちぴちギャルじゃあ！」

とか言つて襲い掛かるでしょう。

「ふおおお！ ぎやるじゃあ！ ぴちぴちギャルの大漁じゃあ！」

出てきやがりました。どうやって龍宮城を探し当てたのか疑問ですが、お爺さんならば出来るのでしょう。

「ワシの嫁になってくれえ！」

「いやあ！」

乙姫は両手を広げて近寄ってきたお爺さんにきついピンタを一撃放ちました。

「ほげ！」

お爺さんは珍妙な声をあげると、どこかにすっ飛んでいきました。さすがは乙姫、天下一の強さです。

「もし、そこな娘」

今度はお婆さんの登場です。このままじゃ、『異説鬼退治』じゃなくて『爆裂ジジババ列伝』にタイトル変えたほうがよさそうです。

「何でしょうか？」

乙姫は応えます。

「ここにセクハラジジイが来なかったかの？」

「来ましたよ、さつき」

乙姫様がピンタで張り飛ばしたのですが。

「ほう、そうか」

「しかも、私に求婚までする始末で」

お婆さんの額の青筋がはつきりと見えました。

「ほう……一度冥府まで送ってやらねばならぬようじゃの。配下の NOBUNAGA に命じて、宇宙からの空爆撃滅暴走特攻掃討作戦を実行するべさ」

と宇宙語レベルなわけのわからん台詞を残してどこかにワープしていきました。

もはや人間業ではありませんが、そこは突っ込んででは駄目です。

一同は啞然としています。亀さんだけはそのことを知りませんでした。

さて、宴が始まります。

乙姫をはじめとした美女は宴会場に設けられた壇上で踊り始めました。

それを見ながら、桃太郎たちは亀と食事をしています。これもまたシユールな風景です。

「おい、次は鶏の丸焼きだ！」

亀が威勢良く声を上げます。

すると、料理されてはたまらんと鳴く鳥が厨房へと運ばれていきます。あれは鶏ではなく、どう見てもキジでした。

「待つて、かわいそうだよ」

桃太郎が声を上げます。

「何だと？ 俺様のもてなしが受けられねえってのか？」

ほろ酔い気味の亀がちよっとガラ悪く言いました。

「そうじゃないけど、殺しちゃうんでしょ。だったら、僕たちの仲間にして鬼が島？を倒しに行くほうがいいかなと思って」

ダイゴロウが桃太郎の意見に賛成します。サルは出されたご馳走を平らげるので夢中になっています。

「そういうことかい。なら、俺も混ぜな」

亀はあることを提案しました。

異説鬼退治？（後書き）

こんばんは、Jokerです。

ほぼ修正なしです。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

## 異説鬼退治？

桃太郎の助けにより、キジは丸焼きをまぬがれました。

ついでに

「俺様も鬼退治とやらに混ぜろ」

との意見で亀も鬼退治に同行させることにもなったのです。

「鬼退治に亀はいらん」

との桃太郎の意見を強引におしのけて、亀は元気よく出発の支度をしていきます。

宴会を強制的に終わらせると、亀は桃太郎たちを乗せて龍宮城から飛び立とうとしていました。

「亀さん、気をつけて！」

乙姫はハンカチを手に持って、のんきにバイバイしています。その後ろではお爺さんが

「乙姫タン、ハアハア」

とかセクハラまがいの行動を取っているのですが、誰も気付きません。おっと、お婆さんがやってきて、お爺さんの首に縄を巻きつけました。そのままお爺さんを愛用しているバイク『愚煉邪魅羅<sup>グレンジャミラ</sup>』にくくりつけます。お爺さん以外では死ぬ危険性が150パーセントあるので、良い子は真似しないようにね。

「東名高速逆走引き回しじゃあ！」

お婆さんは気合一発叫ぶとそのままどこかにお爺さんを引きずって行きました。

「うばげあ@せいんがえ・えんごあえん」

お爺さんのコーラスが響きます。金星語でしょうか。とりあえず、冥王星を食べたとかいう、ある国の首相の嫁さんあたりが話してそんな言語です。

ところで、一体何をしたかったのかは神様とお婆さんくらいしか分からないでしょう。お婆さんの奇天烈な行動を理解できるなら、ち

よつと人間終わってる感じがします。

さて、盛大なお見送りを終えて、桃太郎たちは海から陸に戻ってきました。

「おつと、そういえばキジにまだ名前つけてなかったね」

桃太郎が思い出したように呟きました。

「そうだ、利口そうだし、『ポアロ』でどうだろう？」

キジは気に入ったように鳴きました。

桃太郎は仲間たちを引き連れて、一度家に戻ることにしました。

お約束のきび団子が鬼退治には必要だからです。どう使うかはさておき。

家に戻ると何故か、家があった場所に城が建っています。しかも、ロココ式のサンクス宮殿そっくりです。確か、世界史Bで習いました。

桃太郎は何があったのか即座に理解しましたが、仲間が理解できていません。無理もない話ですが。

「お婆さん、時空転移でサンクス宮殿を日本に持ってくるの、やめようよ」

「おお、帰ったか桃太郎」

お婆さんの声が遠くの方からします。いつの間に戻ったんだとか突っ込んではいけません。どこにでも現れる人間ですから。

桃太郎たちは入り口のドアを開けると、豪華な赤じゅうたんが敷き詰められた廊下を歩き、白のシャンデリアの見下ろす中を歩きました。そして、フライパンやら金属バットやらが置いてある大きな台所でははと笑いながら鍋をかき混ぜるお婆さんを見つけました。どこかの邪教徒のようですが、これが日常です。

ところで、お婆さんがかき混ぜている鍋からはもくもくと紫色の煙が立ち昇っています。台所で化学実験を行うなんてエクセレントですね。

「いくら、配下のNOBUNAGAがいるからって、家を宮殿に変えるなんて無茶苦茶だよ」

桃太郎はお婆さんを探し当てて、言いました。

「乙女の夢じゃったからの」

これはお婆さんの弁。

「どこが乙女じゃクソババア」

どこからか戻ってきたお爺さんの突っ込み。地雷を踏みました。

テポドン級です。いやもう、かなり手遅れなんです。

お婆さんは無言で特攻服を着込みました。背中の文字プリントの「邪ジェノサイド乃災怒」が素敵です。どう見ても、賊です。本当にありがとうございました。

「一辺死んでこおい!!!」

どこかで聞いた台詞とともにお婆さんはバイクをふかすと、お爺さんを引き倒してどこかに消えました。

「と、とりあえず、きび団子持って行こうか」

桃太郎は夫婦のどつき漫才を無視して、本来の目的であるきび団子回収に取り掛かりました。もしかしたら、きび団子で鬼が島？を無血開城できるかもしれません。争う必要がなければ、争わないのが一番です。

しかし、きび団子はありませんでした。冷蔵庫にあったきび団子は既に誰かに食べられてしまったようです。

「仕方ないね。お婆さんのレシピ見て作るしかないか」

桃太郎は城の台所らしき場所で発見したレシピを見て、作ることにしました。ダイゴロウとポアロが手伝います。ホームズはソファに寝転んで、みたらし団子を頬張っています。亀は何故か城で働いているメイドをナンパしています。

「えっと、何々……まずは砂糖と小麦粉を混ぜて……次にニトログリセリンと青酸カリをいれて……」

これを食べたら話のジャンルがコメディからミステリーに変わることに確実です。桃太郎を名探偵にするわけにもいきません。

「最後にティラノサウルスの牙を混ぜて終わり、と」

桃太郎はダイゴロウとポアロの助けを借りて、何とかきび団子を

完成させました。ところで、きび団子って紫色でしたっけ。

お婆さんのレシピをよく見ると、最後にこう書かれてありました。  
『きび団子は暗殺用の武器である』

桃太郎とダイゴロウとポアロは固まりました。

(……これで鬼が島？を倒せと?)

困惑しながらも桃太郎たちはこれを持って、いよいよ鬼が島？に乗り込むことになりました。

**異説鬼退治？（後書き）**

こんばんは、Jokerです。

この話は師匠から駄目だしがあつたので一部修正してお届けします。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

## 異説鬼退治？

桃太郎は犬、サル、キジ、亀を連れて東京湾にある鬼が島？ビルディング前に着きました。

見た目は普通の海運会社ですが、裏では麻薬取引、密入国の手引きをするなど悪事の限りを果たしているとお爺さんから聞いています。

「行くぞ、みんな」

桃太郎は勇壮に刀を構えると、鬼が島？ビルディングに乗り込んでいきました。その後を、犬とキジが追います。サルは鼻くそをほじって、そこらに捨てています。やる気ゼロです。亀は通りがかつた女子大生をナンパしていました。

「クラア！ テメエここがどこか分かってんのかワレ！ 友愛するぞ！」

金髪ほつき頭の白い特攻服を着た兄ちゃんが金属バットを構えて、桃太郎の前に立ちふさがります。なるほど、これが鬼ですか。ちなみに友愛とは気に入らない相手をしばき倒すことだそうです。広辞苑より。

「お前が鬼か！ かかって来い！」

「来いやワレコラ！」

刀と金属バットが耳障りな音を立ててぶつかりあいます。

「ワンワン！」

ダイゴロウが加勢して、鬼に牙を剥きます。ポアロも羽を矢のように飛ばして攻撃します。

「テメエら！ 出て来いや！」

鬼は手下を呼びました。ざっと百人くらいいます。全員リーゼントに金属バット、そしておそろいの特攻服を着ています。大したセンスですね。

「俺ら『武装戦線』の力見せたれや！」

賊の名前は『武装戦線』らしいです。

「なら、こっちはきび団子の力を見せてやる！」

桃太郎はきび団子を賊たちに配りました。ちょうど全員にいきわたりました。賊たちはお腹がすいていたのか、一口で紫色のきび団子を平らげます。

が、食べた瞬間口から泡を吹いて動かなくなりました。

「毒殺完了。後はお前だけだ！」

桃太郎の策が的中します。原作ではきび団子は爆弾として使われたのですが、今回は毒殺用の武器として使います。

「テメエ、汚ねえ真似しやがって。覚えてやがれッ！」

「逃がすと思うのか？ かかれえ！」

桃太郎はダイゴロウとポアロに攻撃の合図を送ります。ダイゴロウとポアロとお爺さんは一斉に鬼に攻撃をしかけました。みつくみく……いえ、フルボッコです。数の暴力です。あれ？ 一人増えますか？

「成敗」

桃太郎はまず、第一の関門を倒すと鬼が島？ビル一階をクリアしました。次に二回に駆け上がります。

「おうコラ、次はワシが相手じゃ。ワシは『愚煉邪魅羅隊』隊長のホゾミヤ」

紅い特攻服を着た、角刈りねじり鉢巻のオヤジが立ちふさがりました。武器は鉞のようです。

「今度はまた賊っぽい鬼が出てきたね」

桃太郎とダイゴロウ、ポアロは戦闘体勢です。ホームズは一個だけ床に転がっていたきび団子を食って倒れました。

「ワシには一階におったボケのような戦法は通用せえへんぞオウ」  
大阪弁です。まあ、大阪にはやぎが多いと思えます。作者が大阪旅行した時もそうでした。数年前になります。

それはさておき、バトル開始です。

桃太郎は刀で切り込みます。それをホゾミは鉞で受けます。

「ダイゴロウは二ト口つけて特攻。ポアロは爆殺用みたらし団子をつけて特攻してくれ」

桃太郎は恐ろしい指令を出します。ダイゴロウとポアロは必死に首を振っています。

「その必要はなかんべ」

どこからか聞き覚えのある声があるとグレネードが飛んできて、ホゾミに直撃しました。窓ガラスを突き破って吹き飛んでいきます。桃太郎がその声の方向に振り向くと誰もいません。やはり幻覚か何かだったのでしょうか。

桃太郎たちが三階に上ると大勢の女子社員が働いていました。パソコンを叩く者や書類整理に勤しむ者、お茶を酌む者など様々です。白ブラウスの上に黒のジャケット、スカートと皆同じ服を着ています。OLの制服ですね。

とにかく若い女性が非常に多いフロアでした。ハーレムですね。

「ひよひよひよ。お嬢さん、ワシとデートせんかの？」

その中に場違いなのが一匹いました。

「な、何なのこのスケベジジイ」

「変態！」

「今セクハラしたわね！」

「警察！」

桃太郎は固まりました。

やってくれたな、お爺さん。

「皆、この階は飛ばして四階に行こうか。四階がこのビルの最上階だし、決戦があると思う。皆、頑張つて悪の根源、鬼が島？を倒そう！」

気張る桃太郎の後ろでは女子社員に袋叩きにされたお爺さんが病院へ運ばれていきました。

異説鬼退治？（後書き）

こんばんは、Jokerです。  
これも再投稿です。

といっても修正なしですが。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

## 異説鬼退治？

桃太郎たちは最上階へとたどり着きました。

そこは何もない部屋でした。蛍光灯が三つ、天井にあるだけで、他には机も電話も伊勢海老もありません。

いくつかある窓からかすかに外の光が入ってきていました。

奥には影が佇んでいます。

「よくぞ来た」

聞き慣れた声があります。

「その声は……おばあ」

「ヴァヴァアTHEウルトラグレートマグナムテンペストLV39  
2メガエンジン搭載ザビエルモード発進！」

そこには甲冑を纏ったお婆さんがいました。無駄に長い名前が素敵です。

「お婆さんが、鬼が島？の社長だったの？」

「そうじゃ。ワシこそ影の総帥、ヴァヴァアTHE……」

「長いからもういいよ、ソレ」

お婆さんはしょんぼりと肩を落としました。

「ともかく、最終決戦と行こう。ダイゴロウ、ポアロ、ホームズ、行くよ！」

ラスボス戦の開始です。桃太郎は抜刀して、構えます。亀さん、涙目です。

「まずはこれでも喰らえ！」

桃太郎はダイナマイトをホームズにまきつけて、それをお婆さんに投げつけました。

「甘いわ！」

お婆さんは金属バットでホームズごとかつ飛ばします。

「サル爆弾作戦は失敗か。次は……」

刀を握り締めました。

「皆で一斉に突撃するぞ。かかれえ！」

桃太郎は二匹の忠実な下僕＋亀と一緒に老婆さんに突撃しました。  
「ラスボスは美人のお姉ちゃんじゃねえのかよお！」

亀さんは怒り心頭です。あまりにも理不尽な怒りですが。

「前は美人でムツチムチの二十歳の女子大生だったのじゃ」

全身包帯ぐるぐるのミイラ男が現れました。声はお爺さんです。

桃太郎たちは攻撃を中止しました。お爺さんが現れるということは何か起こるといことです。さすがに学習済みです。

「あれは、何十年前前のこと。ワシはそのおにやのこに惚れておつた。巨乳で可愛い、目の前にいるクソババアとは対照的な大和撫子じゃった」

ミイラお爺さんはしんみりとした口調で語りました。ミサイルラ  
ンチャーでセクハラジジイをぶつ飛ばさないようにと桃太郎が必死  
になつてお婆さんが暴れるを止めています。

「じゃが、じゃが……！　ワシはその女子おなこに騙されたのじゃ！　散  
々貢がされた上、変態扱いされて警察に追い回される始末！　しか  
も、その女子は鬼が島？の社長をしておる娘。食い物の恨みは恐ろ  
しいということをお婆さんに教えてやらねばなるまいと、鬼退治を始  
めたわけじゃ」

随分アホな理由で鬼退治を始めたものです。というか、突っ込み  
どころが多すぎて突っ込めません。

「ワシは犯罪を起こさずに鬼が島？を攻略する自信がなかった。そ  
こで後継者を育てねばと思つておつたのじゃ。そこに、お婆さんが  
桃太郎を拉致して帰ってきた。これは渡りに船とばかりにワシはピ  
ーンと来た。こやつはワシの願望の救世主になりえると」

桃太郎は怒髪天を衝いているお婆さんを放しました。

「おによれクソジジイ！　よくも浮気しくさりおつたな！　天誅を  
加えてくれるわぐへへ」

「ワシの人生とムツチムチの女子大生を返せえ！」

壮絶な夫婦喧嘩が目の前で行われています。

桃太郎は失笑し、ダイゴロウはあくびをし、ホームズは紫色のみたらし団子を食べたのた打ち回り、ポアロは持ってきた『完全犯罪2009』という本を読んでいます。

「わが社の社長室で騒いでおるのは誰だ？」

突然野太い声が響きました。

桃太郎たちはその声の方に振り向きませす。

「わが名は鬼が島権兵衛。お主たちは何者じゃ」

巖の如き<sup>いわお</sup>体躯をグレーのスーツで固めている壮年の男でした。長身は天を衝くほどで坊主頭が光ります。右手には金棒。なるほど、この男が『鬼』ですね。

「セクハラジジイ！」

「爆裂ヴァヴァア！」

最低な自己紹介で雰囲気ぶち壊してくれてありがとうございます。

「こつちのエイリアンは無視してください」

桃太郎はクールに言いました。

「僕は桃太郎。東京都大江戸高校一年生です。こつちは犬のダイゴロウ、キジのポアロ、そしてそこでのた打ち回っているアホはサルのホームズです」

てきぱきと自己紹介を済ませます。亀はいじけていますが、放置プレイです。

「お主が桃太郎か。現代になっても桃太郎一族と戦うとは、これも宿命か」

ダンディな『鬼』は金棒を構えます。

桃太郎も刀を構えますが、目は相手を捉えておらず、虚空に彷徨っています。

「どうした？ お主はワシを倒しに来たのではないか？」

桃太郎は沈黙で答えました。

「桃太郎！ とつとと鬼を倒してぎゃるをお持ち帰りのじゃあ！」

その声は木霊するだけでした。

「これ以外に、戦う以外に解決策はないのかな？」  
桃太郎は強い視線を鬼が島権兵衛に向けました。

## 異説鬼退治？（後書き）

おはようございます、Jokerです。

そろそろ鬼退治も佳境です。

今までお付き合いくださった方、ありがとうございます。

ではまた次回お会いできることを祈りつつ……

## 異説鬼退治？

「面白いことを言う男じゃ。お主とワシが戦う以外の解決策だと？」  
鬼が島権兵衛は豪快に笑いました。

「そうです。僕は鬼が島？を倒す理由がありません。ただ、そこに  
いるセクハラジジイの願望ですから。僕の願いや目標ではありません  
ん」

桃太郎はまっすぐな眼差しを鬼が島に向けます。

「桃太郎、ワシのぎやるがかかっておるのじゃ！ 戦って鬼が島？  
をぐばあ！」

お爺さんがお婆さんに轢かれました。

「というわけですから、僕は失礼します。このお爺さんは煮るなり  
焼くなりしてください。鬼が島？の女子社員にセクハラまがいのこ  
とをしていたみたいですから」

それを聞いて鬼が島は豪快に笑いました。

「よかるう。珍しい桃太郎よ、お主の願いを聞き届けよう。これか  
らは我らは友好的に接していいこうではないか。ワシも今のお主に敵  
意は持てぬ」

こうして、鬼退治は鬼が島？を攻略することなく終わりました。

桃太郎が帰った後

「うちの女子社員が随分と世話になったようじゃな」と鬼が島はお  
爺さんの方を向きました。

「ぎやるが……ボインが……」

聞いていません。

「貴様はすぐに立件して脱税総理と同じく大江戸警察の豚箱にぶち  
込んでやるから覚悟せい！」

こうしてお爺さんは大江戸警察に再び捕まり、平穩が戻ってきま  
した。

桃太郎は今日も大江戸高校に通います。舞姫まいひめという彼女もでき、

毎日がとても楽しいとmixiに書いています。

そんな平和なある日、鬼が島権兵衛が桃太郎の家を訪れました。スーツでびしつと決めているあたり、鬼が島？の代表者である貫禄がにじみでています。

「やあ、桃太郎。舞姫と仲良くしているようだな」

「はあ」

桃太郎は鬼が島の言葉の真意がつかめません。

「舞姫はワシの娘なのじゃ。そこで時期鬼が島グループ総帥に、君になつてもらいたいのだ」

「ええええっ！」

お茶を出していたダイゴロウがびっくりとしました。ポアロは読みかけの推理小説『緋色の研究』をぼとりと落としました。ホームズはみたらし団子をのどに詰めてのた打ち回っています。

「と、突然過ぎませんか？ それに僕は高校生ですし」

「まあ、時期総帥じゃな。良い後継者が社内にはいないのでな、君に帝王学を仕込んで、跡継ぎをしてもらおうと思っっているのだ」

お爺さんが窓ガラスを突き破って家に戻ってきました。玄関から入れといつても多分無駄でしょう。

「おのれ桃太郎、そんなハーレムを爺は許さんぞ！」

桃太郎と来訪者は鬱陶しそうに家の主を見ました。

「そういうことなら、ワシを取締役ぐらいにせんか！ そしたらぎやるとセクハラし放題じゃぐへへ」

「いい加減悟つたら？」

桃太郎がため息をつきます。お爺さんの背後には核ミサイルをよつこらせと片手で運んでいるお婆さんがいました。

「ワシが世界のぎやるを手にいれてウハウハになるのは定めなのじや！」

鬼が島権兵衛は目を点にしています。

「……言い残すことはないか？」

恐ろしい声でお婆さんがゆらりと現れました。

「……こ、これは何かの間違いじゃ」

お爺さんは笑顔でミサイルを持ち上げているお婆さんを見ました。  
「金星までドライブするがいいべさ！」

お婆さんは手際よくミサイルにお爺さんを縛り付けると、庭にそれを片手で運び、火炎瓶で点火して打ち上げました。

「しよええええええ！」

情けない声が空から降ってきましたが、桃太郎は完全に無視して  
「すみません、鬼が島権兵衛さん。これが我が家の日常なんです」と話を戻しました。

「すさまじい家庭で育つたのだな。ともかく、後継者の話は君が学校を卒業してからにしよう。それでいいかね？」

「はい、お爺さんはそれまでに躑けして、人畜無害にしておきますから」

「多分無理だと思うが、頑張れ」

「努力はします」

ということ鬼退治は完全に終わりを告げました。

これ以後、桃太郎は『鬼』たちとの関係改善に努めました。ようやく、鬼が島？との因縁もなくなったかと思いきや、お爺さんが手榴弾を鬼が島？本社にはらまくという事件が起こりました。ついでに、お婆さんが暴走族『集英組』を率いて鬼が島？本社前でカツあげを行うという事件が起こりました。

「お爺さんや、このままでは桃太郎が主役になってしまうべさ」

「うむ。婆さんや、ここはひとつワシらが主役ということを思い知らさねばならん。世の中にジジババが主役になってはいかんというドブプラー効果はないんじゃないかお」

この事件によって、鬼が島？は桃太郎たちとの関係を断ち切ることを決定。最後まで鬼が島権兵衛は反対していたものの、全社的な意見を曲げることは出来ませんでした。そして、桃太郎は鬼が島？の次期総帥の道は途絶え、結局大学へと進学することになりました。  
今日も平和な一日が始まります。

お爺さんは盗撮用のカメラを手に、都内大江戸線に。お婆さんは川へ洗濯に行きました。

すると、川上からどんぶらこ、どんぶらことお爺さんが流れてきました。

当然の如くお婆さんがそれを無視します。

しばらくすると、川上からどんぶらこ、どんぶらこことホームズが流れてきました。仕方ないので、お婆さんはサル鍋にしようとそれを捕まえて家に戻りました。

「桃太郎や、今日はサル鍋にするぞい」

「食材ならスーパーで買ってきたから、これ使つてよ」

桃太郎は鍋に放り込まれそうになっているホームズを助け出ししました。

「今帰つたぞ」

お爺さんが戻ってきました。全身に矢が突き刺さっています。一体何があつたのかは誰にも分かりません。

「今日は猪鍋かのう」

ダイゴロウとポアロが手伝いに入ります。

「さあ、美味しいご飯を作ろう！」

桃太郎は美味しいご飯を作り始めました。変わりない、けれどもかけがえのない毎日がずっと続いていきました。

END

## 異説鬼退治？（後書き）

こんにちは、Jokerです。

これまでお付き合いいただき、ありがとうございました。  
これにて異説鬼退治は完結です。

続き等も考えていますが、別の話に力を入れたいので  
異説鬼退治続編はしばらく出しません。あしからず。  
そしてありがとうございました。

ではまた次の機会にお会いできることを祈りつつ……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3281/>

---

異説鬼退治

2011年1月12日21時40分発行